

REPORT 2010

Annual Report of Shiretoko Nature Foundation

2010 年度活動報告書



世界自然遺産知床を未来へ

皆様からのご支援が、知床の自然
保護活動を支えています。



知床財団

SHIRETOKO NATURE FOUNDATION

Contents

2010年度年次報告に寄せて	2	事業報告 6 研修実習事業	
主な出来事	3	 知床の自然保護活動についての体験型教育プログラム事業	21
2010年度の決算概要	5	研修・実習受入れ事業	21
事業報告 1 独自調査研究事業		事業報告 7 受託事業	
 エゾシカ個体群の動態に関する調査	7	指定管理者業務	22
 ヒグマの生態等に関する調査	8	羅臼ビジターセンター関連管理運営業務	22
 生態系の保全・復元に関する調査検討事業	8	世界遺産センター等運営業務	23
 調査研究に関わる交流と成果公表に関する事業	9	斜里町ヒグマ・自然環境管理対策業務	24
 水域における生物群集調査	10	羅臼町ヒグマ・自然環境管理対策業務	25
事業報告 2 財団活動事業		国立公園野生生物管理業務	27
 知床自然センターおよび羅臼ビジターセンター・インフォメーション事業	11	知床生物多様性保全業務	28
 会員サービス事業	12	しれとこ100平方メートル運動地森林再生業務	29
 財団活動紹介・情報提供事業	12	世界自然遺産地域調査業務	30
 寄付拡大推進事業	13	科学委員会等運営業務	32
 財団ホームページによる広報活動事業	14	遺産地域利用適正化業務	34
事業報告 3 自然教育活動開発研究事業		J B N 業務	35
 しれとこ100平方メートル運動普及推進業務	15	事業報告 8 理事会・評議員会・協議会の開催・運営	
 道東自然系施設ネットワーク推進事業	16	理事会・評議員会・協議会の開催・運営	36
 地域向け環境教育事業	16	財団組織改革推進事業	36
 職員の技術知識を高めるための研修事業	18	2010年度の組織概要	37
事業報告 4 ボランティア活動推進事業		寄付のお礼	38
 ボランティア活動推進事業	19		
事業報告 5 普及事業			
普及資料等販売および写真貸出し事業	20		
ヒグマ対策普及事業	20		

 …目次、本文中にあるこのマークは、寄付金・賛助会費によって実施している事業であることを示しています。

2010年度年次報告に寄せて

公益財団法人 知床財団 理事長 関根郁雄

平成22年度は、その最終月を国内未曾有の大震災で終わる形となりました。そんな22年度の活動報告をお届けするにあたり、まず、このたびの東北地方における大地震、津波、そして福島第一原子力発電所の事故に伴う放射能汚染などにより被災された多くの方々に、心からお見舞い申し上げます。

さて、私ども知床財団は、平成23年度から公益財団法人として新たにスタートいたしました。認定の申請に向けた準備には実に2年間を費やしましたが、厳しい認定基準をクリアできたのは、ひとえに私どもを応援して下さる賛助会員や寄付者の皆様のおかげであると、感謝に堪えません。同時に、公益性が認められたということは、私たちの活動、なかでも皆様のお志に支えられた独自事業の展開に、より一層の社会的責任が求められることを意味するものと、気を引き締めているところです。

また、23年度は、知床半島最大の観光利用地である知床五湖に、新しい利用の仕組み——利用調整地区制度——が導入された年度でもあります。この地で、本当に知床らしい雰囲気を感じていただくために、もともとこの住人であるヒグマと共にある国立公園の利用の

仕組みを提案し始めてから、15年あまりの歳月が流れました。このたびの知床五湖への利用調整地区制度の導入は、そうした私たちの提案がようやく実現したことを意味します。そして、この国内2例目の利用調整地区制度の導入に伴い、私たち知床財団は、自然公園法に基づく公園管理団体と指定認定機関の双方の指定を受けた、国内唯一の団体となりました。

これをひとつの契機として、知床が末永く多くの人々に感動を与える地であり続けるよう、私たちは、この地の保護と利用のあるべき姿について、より一層の検討を重ねて行く所存です。

公益法人制度は、社会に貢献する活動を担う団体への寄付者の皆様が、税制上の優遇措置を受けられることなどを通じて、国民に支えられた社会の仕組みを創設しようとするものです。今、既に、当財団の活動に賛同いただいた個人や企業の皆様から、大きな支援を受けつつあります。

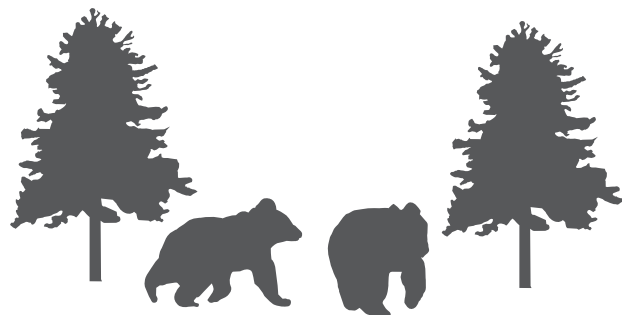
自然遺産という世界の信託を受けた知床の原生自然を、広く国民に支えられた形で保全していくべく、今後とも皆様のご理解、ご協力を賜りたく、お願い申し上げます。

Ikuo Sekine

北海道斜里郡小清水町出身。斜里町政に長く関わり、日本のナショナル・トラスト運動の草分けとなった『しれとこ100平方メートル運動』スタート後の昭和54年度からは、企画振興課長として、この運動を精力的に推進した。その後も斜里町助役、副町長を歴任。平成5年には知床の世界遺産登録を提案、当時の牛来町長とともに登録に向けた取組みに邁進し、知床の自然保護活動の歴史に新たな1ページを刻んだ。

[歴代理事長及び任期]

藤重千秋 1988年9月23日～1997年9月23日
法量 武 1997年9月24日～2003年3月31日
森 信也 2003年4月1日～2009年3月31日
関根郁雄 2009年4月1日～



2010年度の主な出来事

4月 APRIL

○知床岬エゾシカ密度操作実験 P.30参照
知床岬の貴重な植物群落の回復を目的に、エゾシカの個体数を減らすエゾシカ密度操作実験事業を流氷が去るのを待って実施しました。

○エゾシカライトカウント P.24参照
エゾシカの長期的な個体数の変化を調べるため、夜間にライトを照らして頭数をカウントする調査を毎年春、秋に行っています。

その他 ●エゾシカ季節移動調査

5月 MAY

○ウトロ小中学校ヒグマ授業 P.16参照
ウトロ小中学校の全校生徒を対象に毎年行っています。

○第1回知床森づくりの日・春 P.15参照
全国から集まった仲間たちと、4泊5日の合宿形式で森づくりをするイベントです。

その他 ●知床岬エゾシカ自然死亡個体調査 ●エゾシカ季節移動調査
●第1回理事会・評議員会 ●斜里高校自然体験学習
●ミニレクチャー実施 ●SEEDS春号発行

6月 JUNE

○第3回知床五湖利用コントロール導入実験 P.33参照
平成23年度から導入される知床五湖の新制度に向けて、ヒグマの出没に伴う閉鎖が頻発する遊歩道を、ガイド同行限定で利用する実験が行われました。

○羅臼中高ヒグマ授業 P.17参照
中高一貫教育が行われている羅臼では、中学1・3年生、高校2年生を対象に毎年クマ授業を行なっています。

○オオセグロカモメ営巣状況調査 P.26参照
カモメ被害に悩まされている羅臼町において、住民自身で防除・対策するための予備調査として、カモメの営巣状況を調べました。

その他 ●知床世界自然遺産登録5周年シンポジウムへの参加 ●ヒグマ生態捕獲 ●知床岬鳥類相モニタリング ●定山溪クマ対策研修 ●知床キッズ「鯨ウォッチング」 ●各種研修受入

7月 JULY

○世界遺産登録5周年記念イベント開催 P.23参照
知床の世界自然遺産登録5周年を記念して、旭山動物園の坂東園長を講師としてお招きし、「坂東園長と考える世界遺産知床の未来」と題して講演やクイズ大会を実施しました。

○羅臼ビジターセンター 来館者10万人達成 P.11参照
2007年の新羅臼ビジターセンター開館以来、4年目となる2010年7月1日に累計来館者10万人を達成しました。

その他 ●各種調査活動本格化 ●各種研修受入 ●水の学校夏まつり ●第1回知床世界自然遺産地域科学委員会 ●第31回知床自然教室

8月 AUGUST

○ミニレクチャー P.21参照
ゴールデンウィークに続き、夏休み期間中にもダイナビジョン映像の空き時間を利用した無料のミニレクチャーを開催しました。

○色丹島沿岸生物調査 P.9参照
北方領土の色丹島での調査に職員が参加し、魚類や貝類などの生物採集調査を行いました。

その他 ●第2回知床森づくりの日・夏 ●知床キッズ「星空観察」
●JICA研修 ●SEEDS夏号発行

9月 SEPTEMBER

○国後島ヒグマ調査 P.9参照
北方領土の国後島での「白いヒグマ・コウモリ調査専門家交流訪問団」に職員が参加し、国後・択捉のみに生息するとされる白い体毛をもったヒグマの調査を行いました。

○サクラマス産卵状況調査 P.8参照
100平方メートル運動地に隣接する岩尾別川・幌別川でサクラマスの個体数と産卵床の調査を行いました。

その他 ●知床キッズ「ロックペイント」

10月 OCTOBER

○イベント「旭山動物園の知床ヒグマわくわくウィークエンド」 P.28参照
旭川市旭山動物園において、人と野生動物の共存について考えてもらう2日間に渡るイベントを実施しました。

○大型映像「ダイナビジョン」のデジタル化 P.22参照
知床自然センターの大型映像が、22年間続いたフィルム上映からデジタル上映に切り替わりました。

その他 ●シカライトカウント ●知床キッズ「稚魚の放流体験」「郷土料理体験」 ●エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ ●第14回しれとこ森の集い（植樹祭）

11月 NOVEMBER

○100平方メートル運動地 取得完了 P.15参照
1977年から始まった「しれとこ100平方メートル運動」が、目標としていたすべての保全対象地の取得を完了しました。

○エゾシカ捕獲手法（シャープシューティング）検討の開始 P.31参照
羅臼町のルサ・相泊地区において、捕獲手法の1つであるシャープシューティングを試行的に実施しました。

その他 ●海生哺乳類モニタリング調査 ●斜里市街地の小学校でのヒグマ授業 ●特別展示イベント「知床の海の生き物獲ったどおー!」 ●第14回森づくりワークキャンプ ●森林再生専門委員会会議 ●アラスカ研修報告会 ●ウトロ中学校職業体験受入 ●知床キッズ「カヌー体験」 ●SEEDS秋号発行

12月 DECEMBER

○ウトロ小学校全児童を対象とした環境授業の実施 P.16参照
低・中・高学年に分かれて、生物多様性や外来種などについて環境授業を実施しました。

○第2回「プロジェクト未来遺産」に選定 P.38参照
社団法人日本ユネスコ協会連盟が主催する「プロジェクト未来遺産」に、知床財団が企画したヒグマ学習教材トランクキットが選定されました。

その他 ●オジロワシ・オオワシ越冬個体数調査 ●知床キッズ「もちつき」 ●第2回理事会・評議員会

1月 JANUARY

○「スノーシュー・歩くスキーコース」設置 P.15参照
知床自然センター周辺にスキーコースを3コース設置し、そのうち2コースをしれとこ100平方メートル運動地公開モデルコースとして運営しました。

○エゾシカ囲いワナ捕獲の開始 P.31参照
エゾシカの管理手法検討の一環として、羅臼町ルサ地区で囲いワナによる捕獲を試行的に行いました。

その他 ●海生哺乳類調査 ●ヒグマ保護管理方針検討会議 ●知床キッズ「スノーシュートレッキング」

2月 FEBRUARY

○ボランティアミーティング P.19参照
知床で活動するボランティアの皆さんが知床に集い、1年間の活動の振り返りや意見交換を行いました。

○スライドレクチャーの試行的に開始 P.22参照
知床自然センターにおいて、大型映像の定時上映の後、スタッフによるスライドレクチャーを試行的に始めました。

その他 ●世界自然遺産地域生態系調査報告会 ●知床世界自然遺産地域科学委員会 ●エゾシカ個体密度操作実験 ●知床キッズ「オジロワシ・オオワシ観察会」 ●SEEDS冬号発行

3月 MARCH

○エゾシカ航空カウント調査 P.30参照
知床岬でのエゾシカの越冬数や植生との関係などを調べるために、悪天の合間をぬって、セスナ機で上空を飛びながら、エゾシカのカウントを行いました。

○公益財団法人 認定
3月22日に公益財団法人に認定されました。

その他 ●エゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ ●知床自然愛護少年団開拓小屋宿泊研修 ●羅臼ビジターセンター観察会「海のどうぶつ観察会」「オリジナルカレンダー作り」 ●第3回理事会・評議員会

2010年度の決算概要

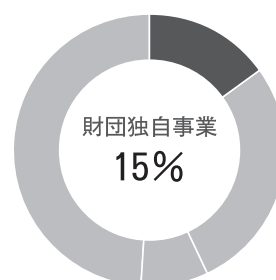
▼ 2010年度の総事業費は 2億3,130万円

財団の事業費は1. 財団独自事業、2. 斜里町・羅臼町委託事業、3. その他委託事業、の大きく3つに分類されます。中でも、財団独自事業は賛助会員や寄付金が重要な財源となっています。賛助会員をはじめとする多くの方々の継続的なご支援により、2010年度は全57事業を行いました。

1. 財団独自事業

(事業数 21 事業費 3,576万円)

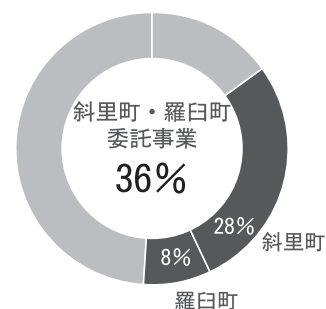
賛助会費や寄付金、知床自然センターでの販売物収入が主な財源となっています。「エゾシカ個体群の動態に関する調査」、「水域における生物群集調査」など全21事業を実施しました。



2. 斜里町・羅臼町委託事業

(事業数 11 事業費 7,775万円)

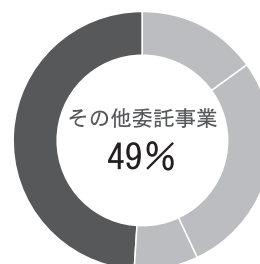
斜里町からは、知床自然センターなどの指定管理者業務やしれとこ100平方メートル運動の現地業務などを受託し、羅臼町からは羅臼ビジターセンター運営事業を受託しました。また両町からヒグマ管理対策事業、自然環境保護管理対策事業をそれぞれ受託し、全11事業を実施しました。



3. その他委託事業

(事業数 25 事業費 1億2,870万円)

環境省やその他の機関から、各種業務を受託し、全25事業を実施しました。



▼ 2010年度の決算報告

(単位：円)

収入の部	計	一般会計	特別会計	支出の部	計	一般会計	特別会計
事業費収入	199,933,017	199,933,017	0	管理費支出	4,750,621	4,750,621	0
寄付金収入	7,782,824	7,782,824	0	事業費支出	211,462,878	211,462,878	0
管理費収入	3,580,619	3,580,619	0	他会計への繰入金支出	1,000,000	0	1,000,000
他会計からの繰入金収入	1,000,000	1,000,000	0	普及研修事業費支出	14,087,130	0	14,087,130
普及研修事業収入	17,420,575	0	17,420,575	特定資産取得支出	8,117,618	8,117,618	0
雑収入	1,036,952	905,157	131,795	当期支出計 (B)	239,418,247	224,331,117	15,087,130
特定資産取崩収入	13,515,375	13,515,375	0	差額			
当期収入計 (A)	244,269,362	226,716,992	17,552,370	当期収支差額 (C=A-B)	4,851,115	2,385,875	2,465,240
				前期繰越収支差額 (D)	17,819,520	-2,569,501	20,389,021
				次期繰越収支差額 (C+D)	22,670,635	-183,626	22,854,261

web <http://www.shiretoko.or.jp/aboutus/kifukoui.htm>

▼ 2010年度の賛助会員の状況

	個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別年会員
2008年度末	669名	1,032名	31団体	2団体
2009年度末	617名	1,033名	36団体	2団体
2010年度末	625名	1,032名	35団体	3団体

この事業では、知床半島の生物群集を特徴付ける大型野生動物の生息状況に関する長期的なモニタリングや生態調査、遺伝的多様性に関する調査を行うほか、調査結果の発表などを行っています。この事業は寄付金、賛助会費などによりまかなわれています。

独自調査研究事業

エゾシカ個体群の動態に関する調査



▼ エゾシカの個体数の増減や行動の傾向を調べるために、斜里町・羅臼町において道路沿いに出没しているエゾシカの数を知る調査や、知床岬地区において冬を越せずに死亡したエゾシカの数を知る自然死調査を実施しました。

エゾシカ日中カウント調査

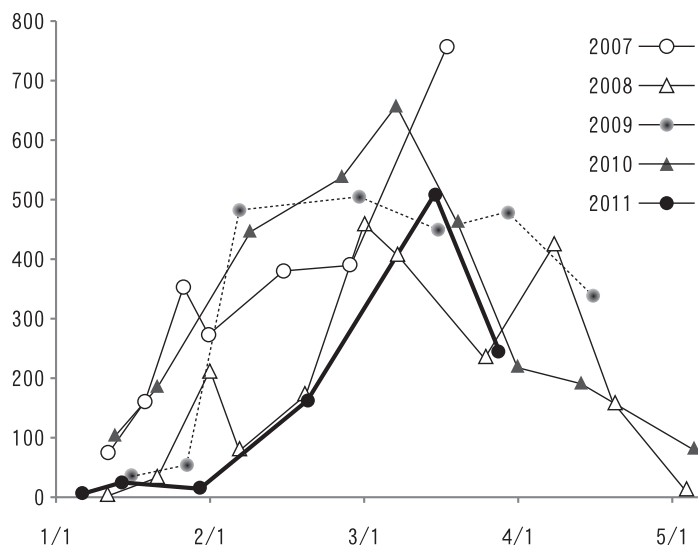
斜里町真鯉地区で行っている日中カウント調査では、午後の国道沿い斜面に見られるシカを冬期間に月2回程度カウントしました。例年、シカは年明けからぼつぼつと見られるようになり、3月中旬をピークに減り始め、5月には少なくなります（図1）。2011年（太線・黒丸）は1月からの増加が例年よりもゆっくりでした。ピークは3月15日で505頭と前年ピーク（2010年、664頭）より2割以上少なく、全体に少なめの印象でした。特に前半は数が少なく、越冬に集まるのが遅かったように思えました。ちなみに、相泊ではこの冬、別事業（p.31）で捕獲のため餌付けなどを行ったため、例年とは大きく条件が異なることから、調査は休止しました。

エゾシカ自然死調査

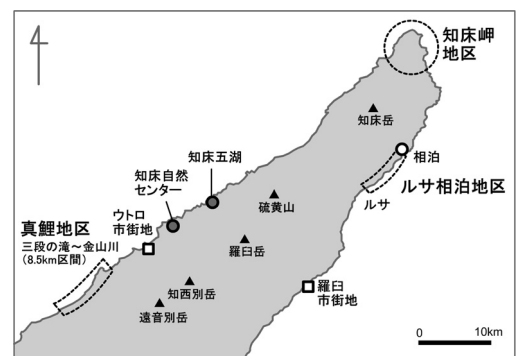
2010年5月の知床岬調査で発見した自然死と思われるシカの死体は1体（オス成獣）。幌別・岩尾別では同年5月末までに5体（オス成獣3、0才2）と、少ない状態が続いています。2011年には、3月末までに同地区で4体の死体を回収しています。



▲ 春先の知床岬の台地上を歩いてシカの死体を探します。



▲ 図1. 真鯉地区の国道沿い（約8.5km区間）でカウントされたシカの数。2011年のデータ（太線・黒丸）は3月末まで。



▲ モニタリング実施箇所。



…寄付金・賛助会費により
実施している事業です。

ヒグマの生態等に関する調査



- ▼ ヒグマの保護・人との共存を目的として、人との軋轢を防ぐため、農地へのヒグマの侵入を防ぐ電気柵の試験などを行いました。

農地への電気柵設置調査

ウトロ高原地区の農地では、2008年度より農家と財団の共同事業として電気柵を設置しています。既存の防鹿柵（いわゆるシカ柵）の外側に電線を張る方式を一部に適用していますが、シカ柵自体の老朽化のため、補修工事が予定されています。それら改修工事とも調整しながら整備しているため、全面電柵化は2011年度になる予定で、全面稼働するまでにはもう少しばかり時間がかかりそうです。



▲ シカ柵の状況。倒木（左）やササの繁茂（右）が管理の課題となっている。

生態系の保全・復元に関する調査検討事業



- ▼ 斜里町主催の「100平方メートル運動の森・トラスト」による生物復元の取り組みとして、北見管内さけ・ます増殖事業協会の協力のもとにサクラマス（サクラマス）の卵の放流が行われています。知床財団は、ふ化の状況の確認など、その後の追跡調査を行っています。

サクラマスのふ化状況調査

2009年の秋期に岩尾別川支流の白イ川へ放流したサクラマスの卵のふ化状況の調査を2010年5月に実施し、稚魚を確認しました。9月にはこれまでに放流した卵が大きくなったのを例年どおり調査し、幌別川・岩尾別川でそれぞれ1尾の親魚を確認しましたが、産卵した跡は確認できませんでした。また、10月には白イ川へ発眼卵を放流しました。



▲ サクラマスの発眼卵を放流するスタッフ。

調査研究に関わる交流と成果公表に関する事業



- ▼ 本年度は8月から10月にかけて、他地域での調査3件に財団職員が参加。また、学会や「しれとこゼミ」の場で研究成果の発表や関係者との情報交換を行いました。

調査研究に関わる交流

2010年度の秋は色丹、国後、そして南サハリンの調査に財団職員が参加しました。

まず8月20～31日、色丹島での外来生物種と絶滅危惧種の調査（北大主催）に職員が1名参加し、河川や浅海域での魚類や貝類などの生物採集調査を行いました。続いて9月10～20日の日程で、「白いヒグマ・コウモリ調査専門家交流訪問団」に職員1名が参加しました。ロシア人専門家と共に同島爺々岳山麓において、国後・択捉のみに生息するとされる白い体毛をもったヒグマのDNA・安定同位体分析用体毛採取と画像撮影、コウモリ類の標識調査等を実施しました。

さらに10月20～23日、東京農大による「環オホー

ック海沿岸生態系と沿岸生物相の調査研究と国際交流」に職員1名が参加、南サハリンの海跡湖で生物採集と調査を行いました。

学会等での成果発表

学会関係では、日本哺乳類学会大会（9月岐阜）に1名が参加しました。また、国立公園内で目撃されたヒグマの秋の交尾行動の記録が国際誌「Ursus」21巻2号に掲載となりました。

自然教育研修所（斜里町ウトロ）等を利用した「しれとこゼミ」は9回開催し、地元自然ガイド、行政関係者、学生や財団職員等、延べ240名の参加がありました。



▲ 国後島に生息する白い体毛をもったヒグマ。



▲ 外来生物種・絶滅危惧種調査専門家交流で色丹島を訪問した際の調査グループ。

▼ 2010年度の「しれとこゼミ」開催要項

実施日	講演者	所属	講演タイトル
5月12日	葛西 真輔	知床財団	「ニュージーランドの外来哺乳類対策」
5月19日	井上 真帆	知床財団	「知床までの道のり」
	近藤 慧	知床財団	「キツネのイロハ」
6月9日	稲葉 可奈	知床財団	「絵と字でつづる 目つきの悪い 生き物的視点」
	山本 幸	知床財団	「知床財団 再び」
6月23日	寺山 元	知床財団	「知床五湖の新制度を3分間で説明するには」
	田澤 道広	知床財団	「羅臼湖の現状」
9月26日	新谷 暁生	ノーザン・アドベンチャー・キャックス	「カヤッカーから見た知床の価値と問題」
10月19日	大西 信吾	写真随筆家	「ミャンマーの自然に息づく命の営み」
11月8日	岡本 征史	知床財団	デナリに学ぶ 国立公園の楽しみ方・楽しませ方
	小高 英之	知床財団	「誰もが満足、シャトルバスシステム／他」
11月17日	岡本 征史	知床財団	デナリに学ぶ 国立公園の楽しみ方・楽しませ方
	小高 英之	知床財団	「デナリの醍醐味、バックカントリー利用／他」
12月8日	増田 泰	知床財団	「国後島の白いヒグマ」
	野別 貴博	知床財団	「花の島、色丹島で魚採り」

水域における生物群集調査



▼ 知床の海域や河川に生息する生物モニタリング調査を、財団の独自事業として継続して実施しています。

海藻類分布調査

2009年度に引き続き、海藻類分布調査を春に1回知床岬で、外来魚侵入状況調査を秋に羅臼側の2河川（チェンベツ川、サシルイ川）で行いました。海藻の分布には、温暖性の種が目立つといった大きな変化は認められず、ニジマスをはじめとする外来魚も確認されませんでした。

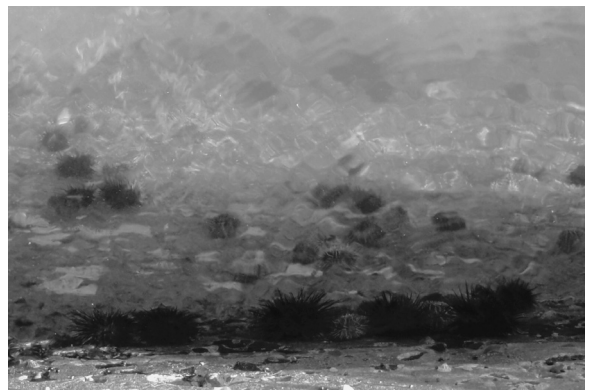
羅臼漁港の深層水汲み上げ施設によって捕獲される深海魚調査は、羅臼町役場と羅臼漁業協同組合の協力のもとに北海道大学と共同で2009年度に引き続き実施しています。とても珍しいチョウチンアンコウやカジカの仲間が確認されています。



▲ 知床岬の岩礁潮間帯における海藻類の分布状況調査地の様子。

浅海域生物相調査

9月には2009年度まで環境省事業として実施されていた浅海域生物相調査の補完調査を北海道大学と東京農業大学と共同で実施しました。その際に、近年目立つようになってきたキタムラサキウニの採集を知床岬の文吉湾で行いました。今後、年齢組成を調べる予定です。



▲ 知床岬の文吉湾の漁港岸壁に多数確認されるようになったキタムラサキウニ。

財団活動事業

知床自然センターおよび羅臼ビジターセンター・インフォメーション事業



- ▼ 知床自然センターと羅臼ビジターセンターのインフォメーションカウンターを拠点に、知床の自然情報や交通情報、登山やトレッキング等に関する問い合わせ等の対応を、当財団ならではの専門性を加味しつつ実施しました。対応の際には、ルールやマナーのほか、ヒグマの目撃情報や遭遇時の注意点など、知床の自然を適切かつ安全に利用してもらうための情報提供を併せて行うよう努めています。

知床自然センター

インフォメーションスタッフは自然情報収集を日々積極的に行い、来館者への案内に役立てました。来館者に楽しんでいただくための新たなサービスとして館内の柱を有効活用した展示物を8種類作製しました。全て財団スタッフによる手作りで、財団スタッフだからこそできる展示内容にこだわりました。また、来館者にどの展示が良かったか投票してもらう仕組みを取り入れることによって、展示物の内容をより深く理解し、楽しく鑑賞してもらえるように工夫しました。財団の活動を映像でわかりやすく来館者に伝えるために2台のモニターを設置し、寄付、および賛助会員入会の促進に努めました。

羅臼ビジターセンター

来館者数は、2007年の移転新築以降増加し続けていましたが、2010度は31,542名となり前年度比92%と、はじめて減少に転じました。このような中ですが、7月1日には新館オープン以降の累計来館者が10万人に達したことから、記念イベントを実施しています。

また特別展示室においては、シャチの写真展やヒグマ展などを企画・実施し、リピーターとして何度も足を運んでいただけるように様々な企画を行いました。そのほか、各種研修、視察、講演、羅臼町内の高校生の就業体験などの依頼に対し、随時受け入れを行いました。



▲ スタッフ手作りの知床自然センター館内の柱展示。



▲ 羅臼ビジターセンター来館者10万人達成。

2010年度に開催したロビー展

▶ 知床自然センター

- ・佐藤孝人写真展
- ・吉村茂節氏 Sawアート展
- ・知床写真倶楽部写真展
- ・厳冬の知床 写真展
- ・世界遺産地域科学委員会パネル展
- ・カヤックで訪れたアリューシャンの島々の写真展 Aleutian Expedition
- ・アラスカ職員研修報告写真展

▶ 羅臼ビジターセンター

- ・羅臼町民ダイバー写真展
- ・倉沢栄一写真展
- ・関屋敏隆原画展
- ・羅臼海上保安署パネル展
- ・あかしのぶこ絵本原画展&ヒグマ展
- ・知床世界自然遺産登録5周年記念パネル展

会員サービス事業



- ▼ 当財団の活動をご支援いただいている賛助会員に向けた会報誌の発行や、会員向けサービスの企画を行っています。

会員入会状況

2010年度の入会状況は、年個人会員の新規入会116口、更新509口、合計625口。終身個人会員の新規入会は9口。法人年会員の新規入会は4口、更新が31口、合計35口。法人特別年会員では1法人(口)の入会がありました。

会報誌「SEEDS」

賛助会員向け情報誌である「SEEDS」は2009年度の年4回の季刊化、オールカラー化から2年目となりましたが、会員の皆さまからは引き続き好評をいただいております。ボランティアや通信販売のチラシを同封しているほか、チラシ内に会員の皆さまからのお便り欄を設け、知床財団をつなぐ定期便としての役割をより充実させることを目指しています。



▲ 会報誌「SEEDS」。

2010年度のSEEDSの主な掲載内容

春号	寝起きヒグマをたどる 電気柵で守られた町
夏号	世界遺産登録5周年記念
秋号	夜の知床 環境教育の出前、やってみよう
冬号	市場で学ぼう 知床の魚 「知床ヒグマわくわくウィークエンド2010」開催報告

財団活動紹介・情報提供事業



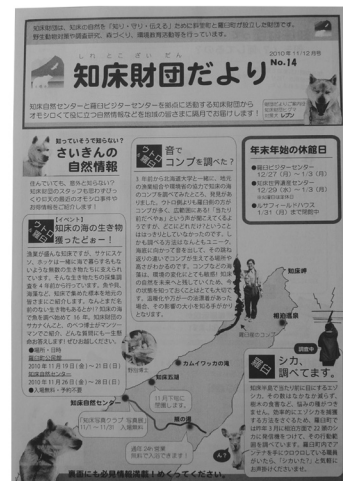
- ▼ 当財団の活動に対する理解と協力を得るために、地元やその他の地域に向けて財団活動紹介を行っています。

財団活動の紹介

地元住民の方々を対象に、知床の旬の自然情報や当財団の活動・イベント情報をお知らせする「知床財団だより」を2ヶ月に1回、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました。読みやすい自然情報や活動紹介を通じて、知床財団の活動をより知っていたいただければと考えています。

また2010年度の夏から、斜里・羅臼両町の宿泊施設にご協力いただき、会報誌SEEDSを町内の旅館やホテルの客室に置かせていただいています。知床を訪れた皆さまに対し、SEEDSを通じた知床財団の活動PRや賛助会員獲得に向けた広報を展開しています。

▶ 斜里・羅臼町民向けに発行している「知床財団だより」。



寄付拡大推進事業



▼ 賛助会費や寄付金は当財団の活動の大きな支えとなっております。館内での募金活動や、施設展示、ホームページ、発行物を通じて、私たちの活動をより多くの皆さまに知っていただき、ご支援・ご協力いただけるよう広く呼び掛けています。

知床自然センター・羅臼ビジターセンターの募金箱

財団活動に対する支援を募るため、2002年度より知床自然センター内に募金箱を設置しています。世界遺産登録以来、毎年約90万円の募金が寄せられていた募金額は、ここ数年減少傾向にあり、2010年度は50万円台となりました。入館者数の大幅な減少が影響していると考えられるため、館内の展示物のリニューアルを行うなど、入館者増加を図るための工夫を行っています。

羅臼ビジターセンターに設置している募金箱は、募金箱の側に活動内容をイラストでわかりやすく紹介したものを展示したほか、漁業の現場では使われなくなったガラス製の浮玉を募金箱の横に設置し、募金のお礼として自由に持参してもらえるようにしました。その結果、前年度比約153%の107,113円の募金を集めることができました。

2010年度の一般寄付の状況

2010年度一般寄付としてお寄せいただいた件数は63件、合計1,191,600円に上りました。企業等からのご支援としては、コベルコ・コンプレッサ株式会社から、「クールアースキャンペーン」における寄付金316,500円をいただいたほか、エヌ・ティ・ティ レゾナント株式会社から「緑のgoo」というキャンペーンの収益の一部、450,000円を寄付していただきました。

ホームページ等での呼びかけ

知床自然センター・羅臼ビジターセンター館内展示や財団ホームページでは、賛助会員募集や寄付の呼びかけを積極的に行っています。そして寄付のお礼の掲載などに力を入れ、継続的な支援が知床財団の活動の支えになっていることを伝えています。今後もより多くの皆さまに当財団の活動をご理解いただき、ご支援いただこうようPRを行っています。

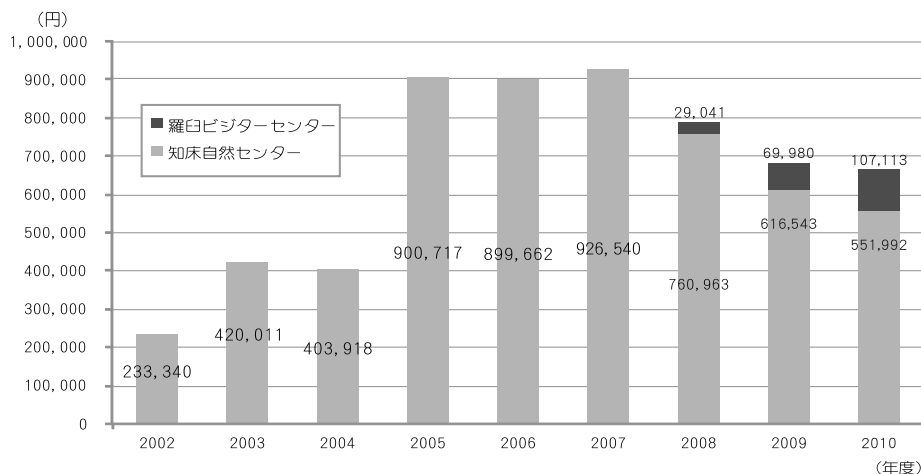


▲ 羅臼ビジターセンターに設置されている募金箱とお礼の浮き玉。

< 知床財団 賛助会員制度の紹介 >

<http://www.shiretoko.or.jp/supporter/supporter.htm>

■ 募金箱への寄付額の推移



財団ホームページによる広報活動事業



- ▼ 当財団の活動に対する理解と支援の輪を広げる「伝える活動」の主軸として、ホームページでの情報発信を継続して行っています。

ホームページの更新

ブログ形式のページでは、「財団の最新の活動」を伝えるページを58回、「知床の旬の自然情報」を伝えるページを265回更新し、ほぼ毎日新しい情報を発信するよう努めました。また当財団のホームページは、「知床」の検索のトップにあり、多くの方にご覧いただいております。

中国語ページの新設

近年増加傾向にある中国人観光客に対応できるよう、既存の英語ページに加えて中国語ページ（簡体と繁体）を新設しました。

＜知床財団公式サイト＞
http://www.shiretoko.or.jp



- ▲ 新設された中国語ページ。

自然教育活動開発研究事業

しれとこ100平方メートル運動普及推進業務



- ▼ 本業務は、斜里町主催「100平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地公開を含めた運動の普及と推進に、現地業務を担う知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として取り組んでいるものです。

運動地公開プログラム

2010年度は、運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、実際の森づくりの作業も経験する運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校の生徒や知床自然愛護少年団を始め、「ユネスコキッズin知床」（読売新聞主催）や日本赤十字北海道看護大学の学生など約240人が、知床の森を訪れ、運動と森づくりに触れていきました。

その他、新しい企画として「森づくりの日」と題した4泊5日の合宿イベントを5月と8月の2回開催しました。合わせて22名の参加者が、季節に応じた森づくり作業に汗を流しました。また、冬期は知床自然センター周辺に「スノーシュー・歩くスキーコース」を設置し、利用者の方に運動と森づくり作業を紹介する地図を配布するなど、運動の普及と運動地の公開に努めました。



▲ 「森づくりの日」にて樹皮保護ネットを巻く様子。

横浜で運動をPR

6月、横浜で開催された「知床世界遺産登録5周年記念シンポジウム」（環境省等主催）に、斜里町と共同で運動を紹介するブースを出展し、会場を訪れる多くの方に運動のPRを行いました。また、同日に

は、関東や関西の運動関係者が一堂に会す機会を設け（参加者63名）、親交を深めるとともに情報交換を行いました。



▲ 「知床世界遺産登録5周年記念シンポジウム」に集まった運動参加者の皆さま。

取得された運動地の利用方針の検討

2010年11月、100平方メートル運動での買い取りの対象地となっていた最後の土地が斜里町によって取得されました。この土地は、多くの人が訪れる知床自然センターなどの施設が建つ幌別園地に隣接していることから、立地的にも重要な場所に位置しています。本業務では、斜里町と連携し、この土地の利用計画の検討を行いました。その結果、この土地は、森づくり作業の場としてだけでなく、運動と森づくりを伝える場所としても活用していく方針となりました。



▲ 100平方メートル運動地で行われた斜里高校の植樹。

道東自然系施設ネットワーク推進事業



- ▼ 道東各地に散在するネイチャーセンターやビジターセンターなど13施設が加入し、互いに情報共有し合いながら、結びつきを深め、助け合うためのネットワークです。

ネットワークへの参加

このネットワークは2000年度から試行的にスタートし、2004年度に正式に発足、その後2006年度まで当財団がネットワーク代表および事務局として運営を担いました。2007年度より事務局業務はもちまわり制となりましたが、引き続きネットワーク運営に積極的に参加しています。

道東各地のフィールド最新情報を各施設が交換し合って掲示する「はしご情報」、各地域の旬の見所を一覧できる「月間いきもの予報」に対して、当財団からも随時情報を提供しました。



◀ 別海町で行われた道東自然系ネットワーク総会。

道東自然系施設ネットワーク参加施設

- ① 知床世界遺産センター
- ② 知床自然センター
- ③ 羅臼ビジターセンター
- ④ 別海町野付半島ネイチャーセンター
- ⑤ 根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャセンター
- ⑥ 霧多布湿原センター
- ⑦ 厚岸水鳥観察館
- ⑧ 塘路湖エコミュージアム
- ⑨ 温根内ビジターセンター
- ⑩ 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ
- ⑪ 阿寒国際ツルセンター
- ⑫ 阿寒湖畔エコミュージアムセンター
- ⑬ 川湯エコミュージアムセンター

地域向け環境教育事業

NEXT PAGE ▶



- ▼ 地域が支える世界遺産・知床を目指して、知床の自然とその自然に携わる人々の活動をより深く知ってもらう機会を様々な形で地域に提供しています。

学校教育との連携

① 斜里町の学校

学校教育では、ウトロ小中学校全校生徒を対象にクマ授業を実施しました。毎春恒例となっているこのクマ授業は、ヒグマに出会った時の対処法を中心として、いろいろな切り口から身近な自然に対して子供たちが想像したり、発見したり、そして自分たちで考えてみたりする手伝いができるよう毎回スタッフが趣向を凝らして行っています。また総合学習の一環として、夏に中学1年生を対象としたポンホロ沼へのフィールドトリップ、冬に小学校1～6年生を対象とした環境教育授業を行いました。本年度は更に11月から12月にかけて峰浜小学校、朝日小学校、斜里小学校の各全校生徒を対象としたヒグマに関する授業を計5回行いました。これらは全国ニュースになった斜里町市街地ヒグマ親

子侵入事件をきっかけとし、斜里町教育委員会がクマ授業を各校に推奨したことによるものです。これまでヒグマの危機管理に対する関心が薄かった半島基部にある市街地の小学校にも、私たちが平素から訴えてきたクマ授業の重要性を認識していただけたものと思われます。これからもクマ授業の継続的な実施を勧めていくとともに、町内全域の環境教育の輪を広げていきます。



◀ 峰浜小学校で行われたクマ授業の様子。

地域向け環境教育事業

②羅臼町の学校

羅臼の中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして行っているクマ授業は、4年目を迎えました。羅臼町内の中学校の1年生と3年生、高校2年生の全生徒が、それぞれのレベルに合わせた内容の授業を受けることになっています。野外実習を取り入れた授業では、学校の周辺を歩きながら、隠された発信器を、電波を受信するアンテナと受信機を使って探すというヒグマの疑似テレメリー調査を体験してもらいました。さらに高校2年生の授業では、ヒグマに関するディスカッションを生徒たちどうして行ってもらうなど、内容の濃い授業となっています。羅臼町教育委員会などと共に、羅臼町内の小学生を対象にして実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、6月から2月までの間に計10回の講座を実施しました。2010年度は天候にも恵まれ、子どもたちと一緒に様々な体験をすることが出来ました。



▲ 羅臼で行われた知床kid's「カヌー体験」の様子。

一般向け講座・展示イベント

知床博物館と共催で行っている知床自然史講座は今年で4回目を迎えました。「知床の海」をテーマに財団スタッフを含む5人の専門家が講演を行いました。

11月に羅臼町公民館と知床自然センターでそれぞれ3日間、知床半島の浅海域調査で採取された魚類、海藻、貝などの学術標本を展示し、スタッフが常駐して解説する特別イベント「知床の海の生き物獲ったどぉー！」を行いました。調査標本は大学などの研究機関で保管されていましたが、ぜひ地元の皆さまに見ていただきたいと思い、約200種が“里帰り”を果たしました。両展示会場合わせて約200人の方にご来館いただきました。私たちの活動を地域に還元できるような催しを今後も行っていききたいと思います。



▲ 「知床の海の生き物獲ったどぉー！」で解説するスタッフ。

職員の技術知識を高めるための研修事業



▼ 国立公園の管理運営の先進事例を学ぶための先進地視察を行い、スタッフの技術・知識を高めました。

先進地での研修

8月下旬から約2週間、スタッフ2名が職員研修としてアメリカ合衆国のアラスカ州にあるデナリ国立公園に滞在しました。公園が提供する多彩なプログラムへの参加、キャンピングやバックパッキングといった実体験、そして現地で活躍しているパークレンジャーとのインタビューを通して同公園で運用されているシャトルバスシステムや、フロントカントリー、バックカントリーの管理について学びました。特に印象深かったのは、国立公園側が地元の観光業者と協議して積極的にビジネスチャンスを創造していることです。例えばデナリが提供するシャトルバスシステムは、地元企業と大手サービス業者のベンチャー企業が運営しており、これにより、1) 人間の利用による自然環境への負荷や野生動物との軋轢を抑えることができる、2) プレゼンテーションによる競争入札のため、サービスの質が保たれる、3) 地元にお金が還元される、4) 観光客は安全に野生動物を観察でき、かつプライベート企業の持つノウハウが活かされたエンターテインメントを享受できる、など多くの利点が生まれています。このシステムは、毎年シャトルバスを使ったマイカー規制を行っている知床国立公園にとっても、今後の展開を模索する上で多くのヒントや知恵やひらめきを与えてくれるものと思われます。

なお、今年度の当該研修で得た情報は、11月8日と17日に斜里町ウトロで、12月15日に羅臼町で、財団独自事業「しれとこぜみ」として報告会を開催し、地元への還元とさせていただきます。また、環境省釧路自然環境事務所へも、可能な限り多くの職員と情報を共有する機会を設定するべく働きかけて行く予定です。



▲ アラスカのデナリ国立公園のビジターセンターで提供される子供向けプログラム教材。



▲ アラスカ研修報告会の様子。

ボランティア活動推進事業

ボランティア活動推進事業



- ▼ 知床の自然を守る取り組みはたくさんのボランティアの方々に支えられています。当財団では、知床の自然のために何かしたい、そんな思いや気持ちを持っている方を対象に、森づくり作業などをお手伝いいただくボランティアを募集しています。

ボランティア参加者

2010年度末でのボランティア登録者数は217名、その内の38名の皆さんが知床を訪れ、森づくり作業などのボランティア活動に汗を流しました。総活動日数は48日間、延べ121人の力が知床に集まりました。参加していただいた方の年齢層は、10代から70代までと幅広く、また道内のみならず関東や関西などからもたくさんのボランティアの皆さんに駆けつけていただきました。

活動内容

2010年度の活動内容は、「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくり作業や羅臼ビジターセンターを拠点に近隣の遊歩道の整備作業などを行いました。

森づくり作業では、苗木を育てている苗畑の草取りや防鹿柵の支柱の交換作業などたくさんの人手が必要な仕事が多くあり、ボランティアの皆さんのご協力が不可欠なものとなっています。また、新しく始めた羅臼での活動は、今後もよりたくさんのボランティアの皆さんに関わっていただけるよう取り組んでいく予定です。2月には1年のボランティア活動を振り返る「ボランティア・ミーティング」（参加者14名）を開催しました。



▲ ボランティア・ミーティングにて「100平方メートル運動」の説明をするスタッフ。

活動の紹介

知床財団のホームページでは、ボランティアの活動報告を掲載しています。また、2010年度のボランティア活動のまとめとして「ボランティア通信」を作成し、一年間お世話になったボランティアの皆さんへお送りしました。

ボランティアの皆さんがこの活動を通して、知床の自然環境の保全に貢献するだけでなく、知床の自然に触れ、そして理解を深めることで、これからも知床を応援する気持ちをもっていただければ幸いです。



▲ 防鹿柵の修理の様子。

< ボランティアについて >

<http://www.shiretoko.or.jp/intern/volunteer.html>

普及事業

普及資料等販売および写真貸出し事業

- ▼ 知床自然センターと羅臼ビジターセンターのインフォメーションカウンターで、知床の自然や動植物に関する知識を深める書籍類や、ルールやマナーを普及するパンフレット、自然観察や登山道沿いの植生保護などに役立つアウトドア用品の販売、レンタルを行いました。

普及資料等販売

当財団の活動を広く知っていただくことを目的に、財団オリジナル商品の開発に力を入れました。散策に役立つものの一つとして、スタッフがデザインしたプリントが施された軍手は好評をいただいています。その他にも野外でフィールドノートとして使える、リングノートを作成しました。散策の際に役立つ長靴、双眼鏡の有料貸出しも知床自然センターで行い、長靴は434件、双眼鏡は97件の貸出しがありました。特に長靴に関しては羅臼湖利用者のレンタルが定着してきたようです。

写真貸出

情報提供事業の一環として、知床の動植物や風景などの写真を貸出しました。雑誌や書籍への掲載や、旅行ガイドブックや旅行情報サイト上での知床自然センターなどの施設写真の貸出しを行いました。



◀ 人気の知床財団オリジナル軍手。

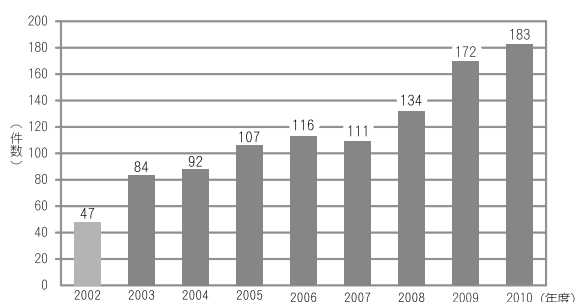
ヒグマ対策普及事業

- ▼ ヒグマが高密度に生息する知床で、万に備えたヒグマ撃退スプレーは必需品です。知床でのヒグマ撃退スプレー携帯を普及させるための貸出事業を行いました。また、ヒグマから食料を守るためのフードコンテナの貸出も行いました。

ヒグマ撃退スプレー・フードコンテナの貸出し

知床自然センター、羅臼ビジターセンター、ルサフィールドハウスで、知床におけるクマ対策上大きな効果のある「ヒグマ撃退スプレー」と「フードコンテナ」の有料貸出しを行いました。羅臼岳登山道入り口にある木下小屋では、ヒグマ撃退スプレーのみの貸出しを行いました。ヒグマ撃退スプレー貸出し件数は、知床自然センター56件、羅臼ビジターセンター18件、ルサフィールドハウス9件、木下小屋100件でした。フー

ドコンテナの貸出しは、知床自然センター4件、羅臼ビジターセンター3件、ルサフィールドハウス8件でした。2009年度にはヒグマにテントを荒らされる事例が発生したため、本年度は知床自然センター館内にフードコンテナの利用を推奨する展示を作成しました。今後、こうした普及活動をさらに拡充し、利用者にヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの携行をより強く呼びかけていきたいと思っています。



- ▲ ヒグマ撃退スプレーの貸出件数の推移。(2002年度は試験的に貸出しを実施)。貸出件数は増加傾向にあります。



◀ フードコンテナ(左)とヒグマ撃退スプレー(右)。

＜クマスプレー・フードコンテナの使用方法＞

http://www.shiretoko.or.jp/bear/bear_10.htm

研修実習事業

知床の自然保護活動についての体験型教育プログラム事業



- ▼ 知床の自然の魅力や知床が抱える課題、当財団の活動などについて、知床自然センターのロビースペースを使って、期間限定のミニレクチャーを行いました。

ミニレクチャー

ゴールデンウィークと夏休みの期間に知床自然センターを訪れたビジターを対象に、知床の自然の魅力や知床が抱える課題、財団の活動などについて、実際の骨格標本や毛皮、小道具などを使いながら財団スタッフが分かりやすく解説する20分のミニレクチャーを無料で行いました。ゴールデンウィークは4月29日～5月8日までの10日間、夏休みは7月18日～8月22日までの36日間実施しました。ミニレクチャーはスタッフの「伝える」技術を高めるための研修としても位置づけ、係・担当を超えて多くのスタッフがレクチャーに

携わったほか、インターンシップの研修の場としても活用しました。



◀ 知床自然センターで毎年行われているミニレクチャーの様子。

研修・実習受入れ事業

- ▼ 野生動物保護管理、調査研究や公園管理の実績を踏まえて、各方面から要請のあった研修・実習・視察等の受け入れ要請に対応しました。

受入実績

国際協力機構（JICA）がODAの一環として実施する、主に発展途上国から来日した行政官への研修に、講師として協力しました。また、北大獣医学部や酪農学園大学の学生・院生の研修や実習にも講師や現地指導員として対応したほか、インターンシップ制度を利用した就業体験を希望する4大学から7名の学生を受け入れるなどしました。



◀ ヒグマの頭骨を補修するインターン。

他にも、道内外の各種団体からの講演依頼、知床や知床以外の場所でのレクチャー、行政による視察要請などに対応し、知床の価値と私たちの活動実績を広く伝える活動に取り組みました。

2010年度の主な研修受入・講演・視察対応等実績

研修受入・講演依頼・レクチャー対応	・西武学園文理小学校 ・斜里町立ウトロ小学校 ・北見工業大学 ・岩見沢市民大学 ・日本赤十字北海道看護大学 ・斜里町越川地区自治会敬老会 ・JICA ・登山向けシンポジウム ・北海道環境活動交流フォーラム ・「富士山：自然公園と環境保全」フォーラム ・世界自然遺産登録5周年フォーラム	・小清水高等学校 ・北海道大学 ・酪農学園大学 ・斜里町生きがい大学 ・網走山岳会 ・電機連合 ・斜里警察 ・北海道環境保全フォーラム
インターンシップ受入	・日本大学 ・琉球大学	・帯広畜産大学 ・岐阜大学
行政視察対応	・佐世保市議会 ・甘日市議会 ・広島県議会	・大阪府議会 ・豊橋市議会

< 視察・講師派遣・レクチャーについて >

http://www.shiretoko.or.jp/pr_release/sisatsu.htm

< インターンについて >

<http://www.shiretoko.or.jp/intern/>

受託事業

指定管理者業務（斜里町指定管理業務）

- ▼ 斜里町の公の施設に係る指定管理者に関する条例に基づいて、公園利用施設の管理運営業務を受託しました。

知床自然センター

施設及び園地周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収等の業務を行いました。2010年度の映像展示館入館者数は23,784名(前年度比76.8%)で、前年度より7,191名減少し、過去最低の数字となりました。1988年の知床自然センター開館以来、フィルムにより上映されてきた映像が、10月にデジタル化されました。スタッフが普段から撮りためている写真をスライドショーとして編集し、その写真に解説を加えて、10～15分のスライドレクチャーを各映像上映後に実施可能かどうかの試行を行い、知床自然センターの新たな魅力づくりを検討しています。

知床自然教育研修所

ボランティアや外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。本年度は延べ215名（826泊）の利用がありました。また、知識・技術の向上を図り交流を進める「しれとこゼミ」の場としても活用されました。

知床五湖レストハウス

知床五湖レストハウス、及び関連施設の維持管理を行いました。2011年度にオープン予定の新施設建設に向け、レストハウスはプレハブの仮施設で運用となりました。また、知床五湖の水道施設管理として、水源地付近にある地下沈澱槽内の水道管交換工事等も行いました。

知床五湖園地夜間閉鎖業務

ヒグマに関わる安全管理、およびオートキャンプによるゴミなどの散乱防止のため、町道知床五湖道路入口を閉鎖して夜間の園地内への立ち入りを制限しました。



◀ 映写機のデジタル化を機に、定時上映の後に行われているスライドレクチャーの様子。

羅臼ビジターセンター関連管理運営業務

- ▼ 羅臼ビジターセンターの運営を円滑に進めるために、来館者対応や各種問い合わせ、情報提供、イベント実施等の運営事業を行い、施設管理全般については環境省と協力して実施しました。

羅臼ビジターセンター（羅臼町・環境省委託業務）

新しい羅臼ビジターセンターがオープンして4年目となりましたが、来館者数は初めて減少に転じました。しかしながら、冬期間の来館者の少ない時期に地元の高校生や羅臼町民の方々の利用も増えているように感じます。インフォメーションボードには、常に最新情報を書き込み、来館者への適切な情報提供を心がけています。

また、羅臼ビジターセンター観察会を夏期に2回、

冬期に2回実施し、町内外の参加者の方々に参加いただきました。



◀ 羅臼ビジターセンター観察会「オリジナルカレンダーを作ろう」の様子。

世界遺産センター等運営業務

▼ 2009年に新しく整備された2つの施設において、昨年に引き続き利用者へのレクチャー・情報提供業務を行いました。

知床世界遺産センター（北海道委託業務）

4月29日から10月31日まで、知床世界遺産センターの来館者を対象としたフロアレクチャーや館内のハンズオンアイテムや教材を利用した普及啓発、およびインフォメーション業務を行いました。



▲ 知床世界遺産センターでレクチャーを行うスタッフ。

7月17日には、知床世界自然遺産登録5周年事業の一環として旭川市旭山動物園の坂東園長が「世界遺産知床のみらい」と題した講演とクイズの出題・解説を行う一般観光客と地域住民を対象としたイベントを企画・運営しました。また、知床の自然保全に関する普及啓発を目的としたチラシを作製しました。平成22年4月1日から平成23年3月31日までの間に98,331名の来館者がありました。



▲ 旭山動物園の坂東園長とクイズに参加した地元の子ども達。

ルサフィールドハウス

（環境省・北海道・羅臼町委託業務）

2009年6月にオープンしたルサフィールドハウスでは、知床岬の先端部などに立ち入る際のレクチャーが重要な業務の一つと位置付けられていますが、2年目に入って情報が浸透してきたようで、先端部に立ち入る前にレクチャーを受けに立ち寄る人が増えています。

レクチャー受講者の増加に伴い、ヒグマ撃退スプレーやフードコンテナの貸し出し数も確実に増加傾向にあり、フィールドに入る際のヒグマ対策の必要性が浸透してきている手ごたえを感じています。また、「知床半島先端部地区利用の心得」をパソコンでわかりやすく見ていただくためのウェブサイトを作成しました（詳細は遺産地域利用適正化事業の部分で後述しています）。



▲ ルサフィールドハウスの2階の展望スペース。

知床国立公園における環境教育事業

（環境省委託業務）

環境省事業として、斜里・羅臼町民を主な対象とした「自然講座」を全5回開催しました。この講座は、両町に住む皆様に、知床の自然や野生動植物などについて知ってもらい、関心を持ってもらうことを目的として実施しています。講師には、当財団職員のほか、知床世界自然遺産地域科学委員会の委員の方々もお招きしました。講座のうち1回は、座学と翌日のフィールド観察（観光船による海の生きもの観察）を組み合わせた企画とし、多くの申込みがありましたが、残念ながらフィールド観察は悪天候のため、中止となりました。

▼ 人とヒグマの軋轢低減を目的に、町内一円のヒグマに関する危機管理のための活動（出没情報の収集や追い払い、ヒグマを誘引するシカ死体などの回収、市街地など人の活動が盛んな場所へのヒグマの侵入を防ぐ電気柵の管理、普及啓発活動など）を実施しました。また、自然環境保全のための定期的なパトロール活動、観光客や地域住民への普及啓発、傷病鳥獣の受け入れ（知床博物館と連携）、ライトカウント（夜間、車で走りながら周囲をライトで照らし、発見した動物種や個体数等を記録する調査）、町内で有害駆除されたエゾシカの年齢や体サイズなどを調べるための下顎骨の処理・分析等の業務を行いました。

ヒグマ対策

町内におけるヒグマの目撃件数は581件、先に示したような危機管理のための活動は計480件に及びました（2010年3月からの1年間を集計）。いずれも一市町村の数字としては極めて高い水準にあります。目撃件数は6～8月に多く、目撃場所の約8割が知床国立公園内でした。対策活動の内訳は、ヒグマの出没に伴う緊急出動や追い払い等の直接的な対応が289件、ヒグマの出没やヒグマとの危険な遭遇を未然に防ぐための活動が191件でした。

知床五湖では日常的にパトロールを実施し、ヒグマ出没時には遊歩道の閉鎖や観光客の誘導を行いました。またヒグマ活動期（6～8月）には、ヒグマの侵入を防ぐ電気柵を遊歩道沿いに設置しました。ウトロ市街地では、市街地を取り囲むように設置した電気柵内への侵入事例が3件ありました。2007年から稼働している電気柵がヒグマの侵入を防いでいますが、今年度は柵のない海岸沿いから侵入するケースが見られました。



▲ 電気柵の電圧を点検するスタッフ。

山林に面した農地では5月上旬からヒグマの出没が本格的に確認され、6月下旬以降、ヒグマによるビート・小麦への農作物被害が発生しました。斜里町から出動を要請した猟友会員と連携して情報収集や対応にあたりました。また10月には斜里町市街地に2頭のヒグマ親子が出没するという事例があり、役場や猟友会と共に対応にあたりました。白昼市街中心部への出没は過去にも例がなく、驚かされました。その後の調査では、2頭とも栄養状態は良好で、生ゴミ等を食べた形跡などもなく、人に依存した生活をしていたわけではない、ということが分かりました。なぜ市街地に出没したのか？明確な理由はわかりません。

自然環境保護管理対策

傷病鳥獣の受け入れ件数は19件で、その内訳はエゾシカなど哺乳類が12件、カモメなどの鳥類が7件でした。外来種として特段の注意をはらっているアライグマに関しては、目撃情報が越川地区で1件、国立公園内（幌別）2件の計3件報告されました。ライトカウント調査は、春期と秋期に各5回、幌別地区と岩尾別地区においてそれぞれ行いました。225頭分のエゾシカの下顎骨の年齢調査と各部計測を行いました。



▲ 保護されたゴマファザラシの赤ちゃん。

野生動物と人の軋轢対策（斜里町緊急雇用対策業務）

観光客の利用マナーから生じる問題や、野生動物と観光客、あるいは地域住民との間で生じているさま

ざまな軋轢など、緊急性の高い課題について、その解決のために、利用のルールやマナーの普及、きめ細かな巡視を特に重点的に行いました。

羅臼町ヒグマ・自然環境管理対策業務

NEXT PAGE ►

▼ 羅臼町一円におけるヒグマに関する危機管理や出没状況のモニタリング、普及啓発および対応時の猟友会との連携等、現地対応に重点をおいた対策事業全般を実施しています。また、自然環境保全に関する現地調査、パトロール、啓発事業、傷病鳥獣の受入、野生生物の生息調査や保護管理業務を羅臼町と連携して実施しました。

ヒグマ対策

2010年度のヒグマ対応は、エゾシカの死体など誘引物の除去や追い払いといった対応件数が111件、目撃件数175件となりました。過去最高の対応件数だった2009年度（対応件数175件、目撃件数165件）より少ない結果となりましたが、目撃件数は若干増加しています。

5月には、相泊以北の海岸で、犬連れの観光客が数mという距離までヒグマに接近されてしまう事例が発生しました。これは、犬を放して海岸を散歩していたところ、最初に犬とヒグマが遭遇し、犬が逃げ戻ることによって結果的にヒグマを飼い主のすぐ近くまで誘導してしまったものです。

6～7月は、ルサ～相泊間の道道脇で例年にはない頻度でヒグマが目撃されました。これによって見物人も多く集まり、対応に苦慮する場面がありました。また、化石浜では環境省職員が至近距離でヒグマに遭遇、後ずさりの際に転倒し、軽傷を負うという事例も発生しました。



▲ 羅臼町昆布浜の近くに出没したヒグマ。

自然環境保護管理対策

2010年度の傷病鳥獣の受け入れ件数は34件で、26種35個体の鳥獣に対応しました。その他、交通事故や網に絡まったエゾシカへの対応が33件、羅臼町役場が有害捕獲したオオセグロカモメやカラスへの対応が13件ありました。自然環境保護管理業務として行った19回のパトロールは、自然情報の入手や羅臼町を訪れる観光客へ利用マナーの普及啓発を行うとともに、ヒグマ出現を警戒する目的で、相泊方面を重点的に行いました。2010年度は大規模な不法投棄などの発見はありませんでしたが、国立公園内での利用者指導を行うなどの啓発活動を中心に実施しました。



▲ 保護したトビにエサを与えるスタッフ。

羅臼町ヒグマ・自然環境管理対策業務

羅臼ふるさと雇用再生事業

(羅臼緊急雇用対策業務)

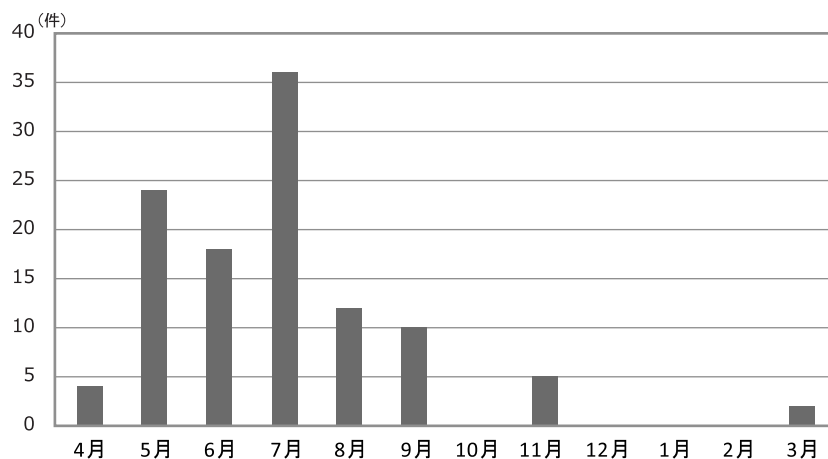
ふるさと雇用再生事業として、羅臼町で生活環境被害の原因となっている野生生物のうち、特にオオセグロカモメとエゾシカに注目し、被害の概要、分布、繁殖状況などに関する基礎データを収集すると共に、住民でも実施可能な防御の手法の効果等についても検討しました。6～9月に町内でオオセグロカモメの営巣状況などを調査し、町内の人工建造物上で最大429巣を確認・分析したところ、オオセグロカモメは人為的な餌をとりやすい地区に集中して営巣していることがわかりました。また過去3年間のシカ交通事故と、住民がシカ侵入防止のための自衛策として自宅の周囲などに設置した網にシカが絡まる事故（合計81件）の発生地点を地図上にまとめ、シカが道路や人家付近に出てくる際の主要経路を絞り込みまし

た。1～3月には目の細かい網の使用試験を行ない、この網にはシカが絡まないことを確認しています。今後は、シカの網への絡まり事故を減らすためにこの網の普及に努めています。



▲ 民家の屋根の上に営巣するオオセグロカモメ。

■ 2010年度の羅臼地区のヒグマ出没への対応件数



国立公園野生生物管理業務

- ▼ 野生生物との共生と適正利用に向けた保護管理業務や現地調査を行いました。知床岬地区などの自然保護上重要な地域の自然保護監視・管理活動業務を、環境省自然保護官事務所配置のアクティブレンジャーと業務分担をしながら進めました。

外来種対策（アメリカオニアザミ・環境省委託業務）

知床岬に繁茂していた外来種のアメリカオニアザミ（以下、アザミ）は、2004～2009年の6カ年の駆除作業により、分布範囲が次第に縮小してきています。2010年度は、縮小しながらも最後に残った密生地である、羅臼側赤岩の台地の縁から海岸までの斜面で重点的な複数回の駆除作業を行いました。もともとアザミの繁茂は、増えすぎたエゾシカが好む植物ばかりを食べてしまい、アザミが育ちやすい環境になってしまったことが大きな原因でした。知床岬ではエゾシカの捕獲が3シーズン行われ、その数が減ってきています。

これまでの駆除とエゾシカの捕獲の相乗効果でその勢力は衰退傾向にはあります。



▲ 知床岬でのアメリカオニアザミの刈り取りの様子。

外来種対策

（セイウオオマルハナバチ・環境省委託業務）

2008年度から3年目となる特定外来種セイウオオマルハナバチの生息状況監視・防除を知床国立公園内を中心に行いました。その結果、知床岬地区で2頭を捕獲したほか、関係行政機関や地元の住民の協力を得て国立公園内（知床岬を除く）で4頭、国立公園の隣接部であるウトロ地区と羅臼地区で341頭、合計347頭を捕獲しました。また6月には、町民向けにそれぞれ斜里と羅

臼でセイウオオマルハナバチについての講習会を開催しました。



▲ セイウオオマルハナバチの捕獲風景。

サケ科魚類遡上状況モニタリング

（北海道委託業務）

ダムに魚道が設置されたサシルイ川とチエンベツ川でサケ科魚類の遡上数・産卵床数をカウントし、改良効果について調べました。8月から翌年1月まで2週間に1度、2河川を河口から上流まで調査を行いました。カラフトマスについては、明らかな改良効果が見られましたが、シロザケについては魚道の上流側で産卵する割合がカラフトマスほど高くないという結果が得られています。



▲ サケ科魚類の河川工作物改良効果に係る調査で撮影されたカラフトマス。

知床生物多様性保全業務（知床海と森の生物多様性保全協議会受託委託業務）

▼ 知床世界自然遺産地域における生物多様性の保全を進める上で課題となっている野生鳥獣の生息状況を把握し、得られた成果によって、より具体的かつ効果的な世界自然遺産地域における野生生物の観察手法や観察ルール等を提案します。この事業は2007年度まで財団独自で行っていたものですが、2008～2010年度の3年間は当財団も含め知床で生物多様性の保全に関わる活動を行っている団体から構成される「知床海と森の生物多様性保全協議会」の委託事業として、環境省の支援を受けて実施しました。

ヒグマの生態に関する調査

ルシャ地区では、直接観察による個体識別と、それらを基にした個体識別台帳の作成を引き続きすすめました。さらにこれらに加えて、糞や体毛からDNAを採取し、DNAを用いた性別判定と個体間の血縁関係推定の可能性を探りました。

また、長年財団独自調査として取り組んできたGPS標識によるヒグマの行動追跡調査についても、知床海と森の生物多様性支援事業の支援を受けて実施しています。今シーズンは新たに1歳オス3頭を捕獲し、このうち1頭を追跡中です。



◀ 捕獲され追跡用の首輪型発信器を装着されるヒグマ。

その他、ヒグマに関する普及啓発事業として、今年も旭川市旭山動物園との共催事業として「知床ヒグマわくわくウィークエンド」を開催しました。昨年度の実績から、さらに趣向を凝らしたイベントを通じてこれまでの成果を広く伝えました。なお2月には、旭山動物園を運営する旭川市と包括的な連携と協力に関する協定を締結しました。



◀ 旭山動物園で行われた「知床ヒグマわくわくウィークエンド」でのヒグマ調査隊の様子。

稀少鳥類（オジロワシ）モニタリング

知床半島におけるオジロワシの個体数動向を把握するため、繁殖状況に関するモニタリングおよび情報集約をしました。また本年度の冬季は、羅臼町～標津町北部の海岸線について、小型船による海からの営巣木調査も実施しました。



▲ 海上からオジロワシのモニタリング調査を行うスタッフ。

海生哺乳類（トド・アザラシ）モニタリング

冬期間の調査として、海生哺乳類モニタリング調査も継続して行っています。年末年始に集中的に行ったトドの陸上センサスで、近年の同時期では最も多い頭数（179頭）を確認しました。陸上センサスでは多数の標識個体を昨年同様確認しました。また船による海上分布調査では、トド、ゴマフアザラシの他、ケイマフリ、コオリガモの群れなどの鳥類を確認しています。

しれとこ100平方メートル運動地森林再生業務（斜里町委託業務）

▼ 斜里町主催「しれとこ100平方メートル運動」の開始から33年、新運動「100平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まり13年が経過しました。この知床の森を守り育てる取り組みの中で、知床財団は、森づくり作業やしれとこの森交流事業など100平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

森林再生作業

知床での森づくり作業は、5年毎の回帰作業方式を取り入れています。2010年度は、3巡目の回帰作業の3年目に当たり、岩尾別台地西側に位置する第3区画を中心に作業を行いました。本格的な森づくり作業を開始して13年、初期の頃に設置した防鹿柵の木製の柱などは、腐食や劣化が進み交換の時期にきています。そのため、順次、運動地各地の防鹿柵の改修作業を進めています。その他にも、苗畑での広葉樹の苗木の育成や植樹、樹皮保護ネットのメンテナンス作業などを行いました。



▲ 防鹿柵の補修作業の様子。

しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者の皆さんをつなぐ交流事業では、「第31回知床自然教室」（7月30日～8月5日、参加者37名）、「第14回森づくりワークキャンプ」（10月30日～11月4日、参加者15名）、「第13回しれとこ森の集い」（10月18日、参加者124名）の企画・運営を行いました。

5泊6日の日程で森づくり作業に打ち込む「森づくりワークキャンプ」は、10年連続の参加者がいるなどリピート率が高く、作業への貢献の面でもなくてはならないイベントになっています。一方で、新しい参加者の獲得が課題として挙げられていましたが、2010年度は、知床財団の独自事業としてワークキャンプ型のイベントを新たに2回開催し、新参加者を含め多くの皆

さんにご参加いただくことができました（「しれとこ100平方メートル運動普及推進業務」参照）。



▲ 第31回目「知床自然教室」に参加した子どもたち。

森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家や地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われ、その方向性などが定められています。現地業務を担う知床財団では、2010年度の活動の成果と課題をまとめるとともに、2011年度の森づくり作業の具体的な方針や計画案を、斜里町と検討を重ねながら立案しました。11月に開催された専門委員会議では、今後の森づくりの方針や計画案について話し合われるとともに、高密度に生息するエゾシカへの対応方針などが議論されました。

運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌「しれとこの森通信 No.13」（A4判カラー8ページ）の企画・編集作業を行いました。また、当財団ホームページのブログ「森づくり日誌」にて、日々の森づくり作業や知床の森の様子を発信している他、斜里町の「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」への掲載用写真の提供、マスコミ等の取材を積極的に受けるなど、運動の広報業務にも努めています。

＜森づくり日誌＞

<http://www.shiretoko.or.jp/saisei/>

- ▼ 環境省が策定した「知床半島エゾシカ保護管理計画」の一環として、知床世界自然遺産地域内において、知床岬地区を主な対象地域としたエゾシカに関する調査のほか、猛禽類や鳥類相に関する各種調査を行いました。

知床岬におけるエゾシカ密度操作実験（環境省委託業務）

知床岬で自然植生に大きな影響を与えているエゾシカの個体数を調整する業務は4年目を迎え、世界自然遺産地域科学委員会での検討を経て、「実験」から本格的な「事業」へ、新たな段階へ移行しました。今シーズンも、昨シーズンに引き続き、エゾシカが知床岬に集結する積雪期に捕獲を行いました。流水に覆われて天候も厳しい厳冬期（2月）には、ヘリコプターで知床岬に乗り込んで捕獲作業を行いました。また、海明け後の3月末に船の日帰り捕獲をさらに1回行い、合計2回の実施でメス成獣20頭を含む計57頭を捕獲しました。これまでの捕獲数は4冬で合計469頭（うちメス成獣271頭）となり、知床岬の越冬群は大きく減少しました。



▲ 冬の知床岬でのエゾシカ捕獲作業の様子。

エゾシカ航空カウント・季節移動調査（環境省委託業務）

知床岬のエゾシカの航空カウント調査は、1月に1回行いました。この調査は、毎年厳冬期にセスナ機で上空から岬の台地上の写真を撮り、シカの数数える調査です。調査の結果、246頭のシカが確認され、4シーズン続けられてきた個体数調整のための捕獲により順調にシカの数が増えていることがわかりました。

また、2月には、知床半島全域を対象にヘリコプターによるカウント調査（以下、ヘリカウント調査）を7日間行いました。これは、2012年4月に予定されているエゾシカ保護管理計画の見直しに向けてのデータ収集の一環として行われました。調査の結果、合計3,930頭のシカを確認しました。総発見数の77%が斜里側で確認され、羅臼側に比べ斜里側にシカの数が多い傾向が確認されました。より詳細に分析すると、前回ヘリカウント調査を行った2003年と比較し、知床岬と半島基部（斜里側）で減少傾向、斜里町幌別岩尾別を中心とした地域で増加傾向、羅臼側では変化なしという傾向が見られました。

また、2008年度冬期にルサ・相泊地区で標識を取り付けたエゾシカについて季節移動調査を引き続き実施しました。22頭中、年間を通じて追跡できた個体は17頭でした。2年間で大きく移動しているのが確かめられたのは3頭で半島基部方向に2頭、先端部方向に1頭でした。その他の個体は通年同地区に留まりました。



▲ ヘリコプターで上空からエゾシカの頭数をカウントするスタッフ。

世界自然遺産地域調査業務

エゾシカの捕獲手法の検討（環境省委託業務）

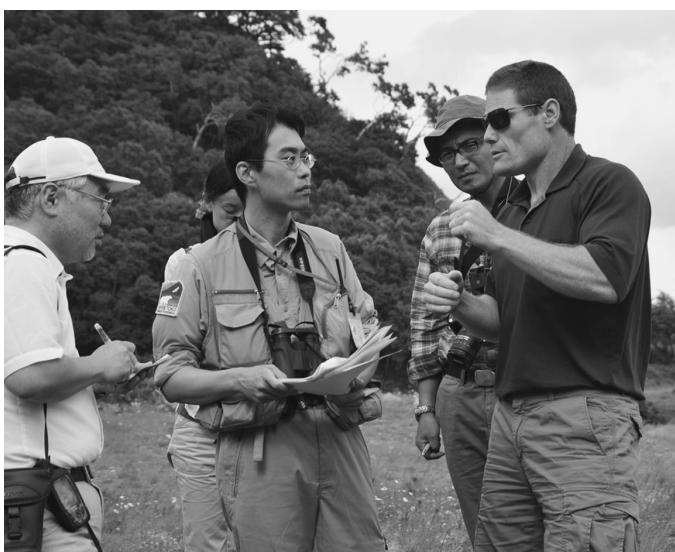
ルサ・相泊地区ではエゾシカの効率的な捕獲手法の試験についても、引き続き実施しました。これは主に、米国で確立されたシャープシューティングと呼ばれる手法を、わが国の現行法で対応可能なものに改変して試行しているものです。このシャープシューティングとは、捕獲を繰り返すことでシカが警戒心を高めて、捕獲効率が落ちることがないように様々な工夫を行う方法です。本年度は4月に12頭、同12～3月に25頭の計37頭の捕獲にとどまり、同地区では各種制約から実施可能場所が少ない点などが浮き彫りになりました。同地区の、隣接地では囲いわなでも1～3月に64頭を捕獲しており、ルサ川河口付近半径200mのごく狭い範囲で合計101頭を捕獲できたことは1つの成果です。なお、シャープシューティングは最近新聞などにとりあげられることもあり、道内外の他地域でシカ対策に取り組んでいる方々が、ルサ地区での実施状況の視察にたびたび来られ、現場での説明などを行いました。



▲ シャープシューティングでエゾシカを捕獲するスタッフ。

海外のシカ捕獲に関する先進事例の紹介（環境省委託業務）

その他エゾシカ関連では、知床でのエゾシカの個体数管理手法を改善するために、海外においてシカ管理の実績を有する専門家を招聘して、ルサ・相泊地区と岩尾別地区を視察していただきました。現地を見ながらの議論を通じて多くの有益なアドバイスを得ることができました。また、招聘した専門家によるセミナーを開催し、エゾシカの保護管理や人材育成に向けた意識や知識の普及啓発を図りました。今後は専門家の助言を参考に従来の実施手法を改善するとともに、囲いわな捕獲など別の捕獲方法も合わせて検討、実施していく予定です。



▲ 海外の専門家との現場視察風景。

世界自然遺産地域調査業務

エゾシカ捕獲が希少猛禽類に与える影響調査（環境省委託業務）

知床岬では、エゾシカの捕獲が希少猛禽類の繁殖に与える影響をモニタリングするため、試行的にその営巣木の近くにカメラを設置しました。2月のシカ密度操作事業の際には、そのカメラを活用し、希少猛禽類の抱卵を確認することに成功しました。

その他、知床でエゾシカの捕獲を実施するにあたって、シマフクロウやオジロワシなど希少猛禽類の生息、繁殖に与える影響を検討し、これらの鳥類により影響の少ないエゾシカの捕獲手法を検討するために、専門家による意見交換会を開催しました。



▲ 知床岬の営巣木にカメラを設置するスタッフ。

知床岬鳥類相モニタリング（酪農学園大学委託業務）

2008年度より実施している知床岬における鳥類相の調査を、本年度も引き続き実施しました。この調査は、知床岬で見られる鳥の種類や数が昔と今とでどれくらい変わったか、また今後、どのように変わっていくかを観察、記録しているものです。知床岬では、近年エゾシカによる植生の大きな変化がみられています。また、2007年度からエゾシカの個体数調整を実施して、冬季に一定量のエゾシカを捕獲しています。その捕獲効果が知床岬の植生にどのように現れるか、この調査結果を通して今後、長期的に観察していく必要があり、引き続き、知床岬における鳥類相のモニタリング調査方法を検討していく予定です。



▲ 鳥類相モニタリングのため知床岬の台地を歩くスタッフ。

科学委員会等運営業務（環境省委託業務）

NEXT PAGE ►

- ▼ 知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、我が国の自然保護区では初めて常設された科学委員会やその附属会議によって様々な議論が行われています。これらの会議の委員は、道内外の多様な分野の研究者や専門家によって構成されています。当財団は科学委員会、エゾシカ・陸上生態系ワーキング、そしてヒグマ保護管理方針検討会議の運営事務局として日程調整、会場準備、資料・議事録の作成などを担いました。

知床世界自然遺産地域科学委員会

2009年度までに遺産地域の管理計画が策定され、2010年度より世界遺産委員会への対応やモニタリング計画の策定など新たな課題に向けて体制が再編されました。第1回の会議は、7月24日に羅臼町で、第2回の会議は2月24日に札幌市で開催されました。



◀ 科学委員会の様子。

科学委員会等運営業務（環境省委託業務）

エゾシカ・陸上生態系ワーキング

2009年度まではエゾシカワーキングとして、増えすぎたエゾシカを中心に議論されていましたが、エゾシカを取り巻く様々な生物を含めた議論をする必要性が生じたため、2010年度からエゾシカ・陸上生態系ワーキングへと改組され、数名の新たな委員が加わりました。会議は5月29日（羅臼町）、10月21日（釧路市）、3月15日（斜里町）と3回開催されました。また、本年度は、シマフクロウやオジロワシなどを調査研究の対象としている専門家も含め、これらの鳥類の保護策とエゾシカ管理等についての情報共有の場が設定され、現地視察も行われました。

ヒグマ保護管理方針検討会議

世界自然遺産地域を中心としたヒグマ個体群の保全と、ヒグマと人との軋轢の軽減を目的として、遺産地域と標津町を含む隣接地域でのヒグマ保護管理に係る統一的な基本方針を策定するために2010年度から新たに開催されています。会議は6月20日（羅臼町）、11月9日（斜里町）と1月24日（釧路市）に3回開催され、保護管理方針の案が概ねできてきています。

遺産地域利用適正化業務

NEXT PAGE ►

▼ 本業務では、知床国立公園の適正な利用を目指し、様々な業務を行っています。

知床五湖関連（環境省委託業務）

知床最大の観光スポットでもある知床五湖では、2011年5月からヒグマとの遭遇に伴うリスクを回避しつつより良い自然体験を提供する新しい利用制度がスタートします。新しい制度の柱となる自然公園法による利用調整地区制度を具体化するために、様々な検討や試行の実施を担いました。

制度具体化のため、2010年6月～7月にかけての約1ヵ月間、ヒグマ遭遇の危険から一般利用が制限されている遊歩道を登録ガイドの引率ツアー限定で利用する実験が実施されました。当財団が環境省のエコツーリズム総合推進業務として、実験の企画運営、とりまとめなどを行いました。

地域関係者が新制度導入に関する協議・合意形成を行う「知床五湖の利用のあり方協議会」の運営業務を環境省より受託し、8回の協議会開催において手数料金額や運用体制など制度運営を具体化するための検討資料作成などを行いました。また、北海道大学の愛甲准教授の協力の下、利用による環境への影響や利用者意識調査などモニタリング計画策定に必要な各種調査を行いました。さらに具体化

した新制度を利用者に広報するため、旅行業界および一般向けの旅行イベントへの参加、説明会の実施、パンフレットの作成なども手がけました。

2011年2月、知床財団は環境大臣より知床五湖利用調整地区の指定認定機関に指定され、新制度の運用においても中心的な役割を担うこととなりました。



▲ 知床五湖を登録ガイドによる引率ツアー限定での利用実験の様子。

遺産地域利用適正化業務

エコツーリズム推進に関する検討業務
(環境省委託業務)

斜里・羅臼両町の観光協会と共に、知床エコツーリズム推進協議会の事務局を担い、地域の発展と、観光利用、自然保護を両立させるエコツーリズムを推進する取り組みについて、協議を行いました。

マイカー規制
(自動車利用適正化対策連絡協議会委託業務)

カムイワッカ地区で行われているマイカー規制の現地連絡調整業務として、運営の円滑化のためにバス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、利用状況の調査や利用者への情報提供、負傷者への対応、ヒグマ出没時の連絡整理などを行いました。



▲ マイカー規制によりシャトルバスが運行されたカムイワッカ湯の滝。

知床半島先端部地区利用適正化
(環境省委託業務)

知床岬など簡単に踏み入れることのできないエリアを利用する際のマナーを示したウェブサイト"シレコ"の作成を行いました。知床半島先端部の利用については長年管理方針が定まらない状態が続いていました。環境省をはじめ多くの関係者の検討の末、この地域の保護と利用の調和を図るため、2008年に「知床半島先端部地区利用の心得」が定められました。しかし、この利用の心得は文字が多く見づらいため、今回のウェブサイト作成にあたっては、イラストや写真を多く取り入れ、一般の方にも理解しやすい内容となっています。



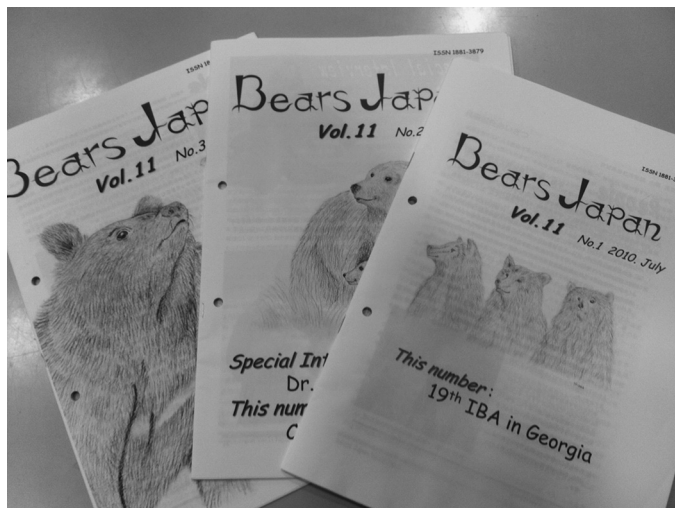
ウェブサイト
「知床半島先端部地区
利用の心得」

JBN業務

- ▼ 日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送、同ネットワーク発行の「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の販売、JBNホームページの運営管理を行いました。

JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」は年3回、計956部を印刷発行し、会員に向けて発送しました。また、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計93部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を中心に、幅広い運営業務をJBN事務局と連携して実施しました。

JBN会員向け
ニュースレター。



■日本クマネットワークについて

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働き働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っているNGO組織です。近年はアジア地域のクマ類の保全に焦点をあてて精力的に活動を行っています。会員は専門家やクマに関心を持つ一般市民、およそ280名で構成されています。

Web <http://www.japanbear.org/cms/>

8

理事会・評議員会・協議会の開催・運営

理事会・評議員会・協議会の開催・運営

定例の理事会・評議員会を、5月、12月、3月の年3回開催しました。5月に行われた理事会では公益財団法人への移行にあたっての「定款の変更」について検討し、12月の理事会では公益法人移行後の定款が承認されました。3月22日に北海道から公益財団法人認定を受け、3月の理事会において公益財団法人への移行を確認しました。

その他、当財団の役員の方々に向け、事務局の最新の動向をお知らせする「財団ニュースレター」を、10月、3月の年2回発行しました。

■ 2010年度役員名簿

理 事	関根 郁雄（理事長）	監 事	中川 元
	辻中 義一（副理事長）		宮腰 實
	佐々木 富美男	評議員	高橋 一三
	金盛 典夫		吉野 弘志
	佐々木 泰幹		木野本 伸之
	川端 達也		遠山 和雄
	村田 良介		金澤 裕司

財団組織改革推進事業

- ▼ 当財団が幅広く事業を展開し、保全活動を長期に継続していくために、必要に応じて組織の見直し・改革を進めています。2010年度は公益財団法人化に向けた具体的な作業が行われました。

2009年5月に発足した公益財団法人移行検討専門委員会は今年度5月、11月、3月の計3回開催しました。12月の理事会での決議を受けて、2011年1月に北海道に対して公益財団法人の本申請を行い、2月23日に開催された北海道公益認定等審議会において「認定の基準に適合すると認める」との肯定答申が出されました。これを受けて、3月22日、正式に公益財団法人に認定されました。4月1日には登記が完了し、正式に公益財団法人としてスタートしました。

公益財団法人化のメリット

- **社会的信頼の維持**
社会的により高い信頼を得られる可能性が高い。
- **税制上の優遇措置**
法人税は公益目的事業以外の収益事業に課税。
利子・所得税は非課税。
- **寄付者の優遇措置**
公益財団法人への寄付は所得控除が認められる。

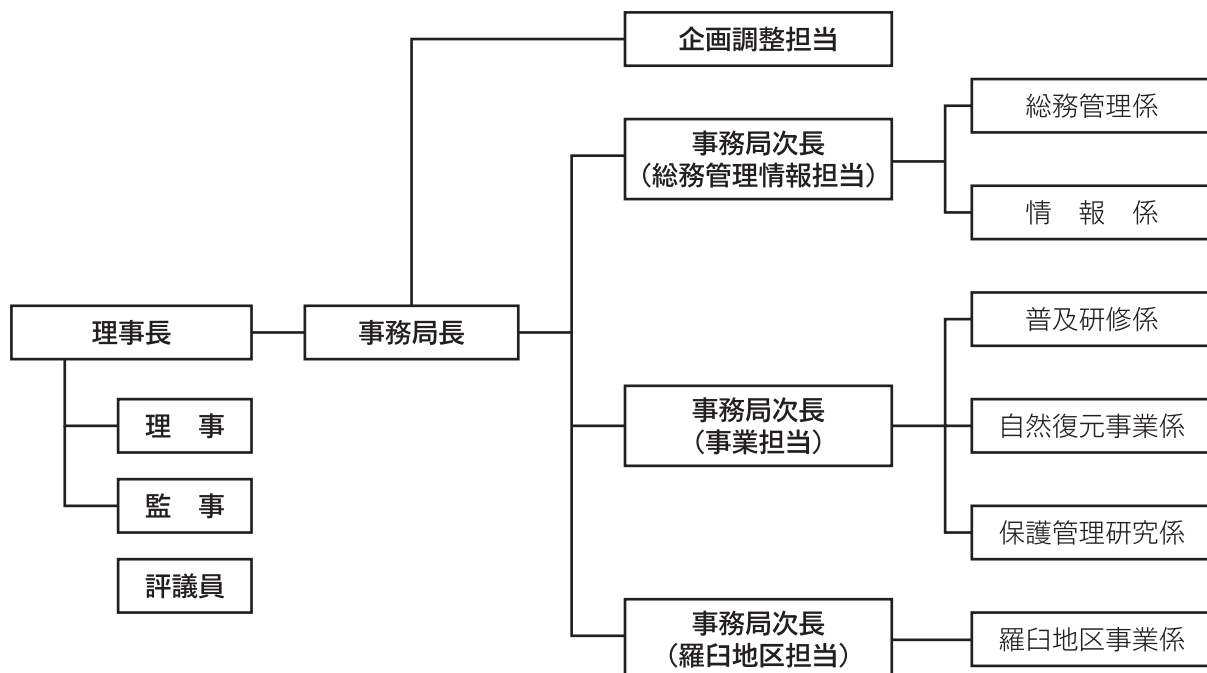
公益財団法人化のデメリット

- **認定基準等による制約**
18項目の認定基準を満たす必要がある。
- **認定手続きの煩雑さ**
事務処理等の手間が増加する。
- **取り消しリスク**
認定後、認定基準を満たさなければ取り消されることがある。

組織概要

名 称	公益財団法人 知床財団 (2011年4月に名称変更 旧名称 財団法人 知床財団)
設 立	昭和63年(1988年)9月23日
設立者	斜里町・羅臼町
基本財産	4,500 万円
所在地	〒099 - 4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別 531番地 知床自然センター
目 的 (寄附行為 第3条)	この法人は、知床半島及びその周辺地域の自然環境に関する調査・研究、自然保護の普及啓発等の事業を行い、もって広く自然保護の保全と利用の適正化に寄与することを目的とする。
事 業 (寄附行為 第4条)	(1) 野生動植物の調査・研究 (2) 自然保護の普及啓発 (3) 自然保護に関する諸団体との提携 (4) 自然環境の保全管理及び公園施設等の管理運営受託業務 (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
職 員	31 名

2011年4月末



「Discover Shiretoko」キャンペーン

インターネットブラウザを提供するモジラジャパン社との共同で2009年6月～9月に開催。知床財団や100平方メートル運動を大々的に取り上げた特設ウェブサイトを開設していただきました。

Web <http://www.discovershiretoko.org/ja/>

「どなたでも知床の自然保護活動に貢献できます！」

知床の自然を未来へ遺していくためには、皆様の継続的な支援が不可欠です。
皆様が知床の自然を思う気持ちを私たちに託して下さい。

知床財団の賛助会員制度

会員になると、知床自然情報誌SEEDSや刊行物を定期的にお届けする他、知床自然センターの映像展示館の入館料免除など各種特典があります。

個人年会員	5,000円/年	法人年会員	20,000円/年
個人終身会員	100,000円/終身	法人特別年会員	100,000円/年
寄 付	おいくらからでも受け付けています。		

●振込先 郵便振替 02750-2-37694 ●加入者名 公益財団法人 知床財団

知床財団の法人特別年会員

 商船三井フェリー (2007.4月～)	 シーライヴ株式会社 (2008.2月～)	 (2010.11月～)
---	--	---

＜寄付のお礼掲載＞ **Web** http://www.shiretoko.or.jp/supporter/support_thanks.htm

寄付のお礼

寄付

エヌ・ティ・ティ レゾナント株式会社

環境貢献型検索サービス「緑のgoo」における収益の一部をご寄付いただきました。

寄付

コベルコ・コンプレッサ株式会社

「コベルコ・コンプレッサ グリーンプロジェクト」の一環である「クールアースキャンペーン」における寄付金をいただきました。

助成金

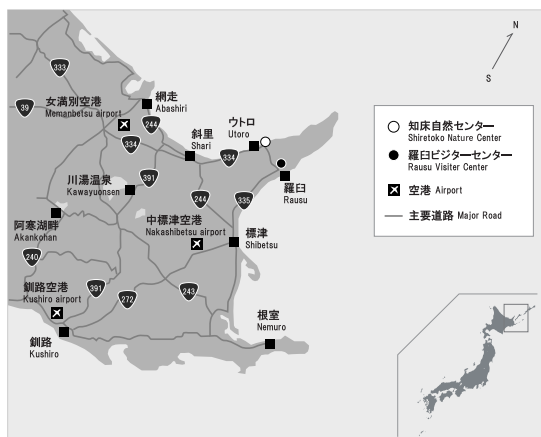
助成金

社団法人日本ユネスコ協会連盟が主催する第2回「プロジェクト未来遺産」の一つに選定されました。「プロジェクト未来遺産」とは、地域の文化や自然遺産を未来へと伝える“未来遺産運動”の一つです。今回の選定を受けて、ヒグマを中心とする野生動物のことや、人と野生動物の共生について学ぶ教材“トランクキット”の作成と普及活動を行います。



REPORT²⁰¹⁰

Annual Report of Shiretoko Nature Foundation



知床自然センター

〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地
TEL 0152-24-2114 FAX 0152-24-2115
E-mail info@shiretoko.or.jp

<http://www.shiretoko.or.jp/>



羅臼ビジターセンター

〒086-1822 北海道目梨郡羅臼町湯ノ沢町6-27
TEL 0153-87-2828 FAX 0153-87-2876
E-mail rausu_vc@shiretoko.or.jp

<http://rausu-vc.jp/>